

長島孝一：1936年東京生れ。早稲田大学建築学科、Harvard GSD, Urban Design 科卒。アテネ人間居住科学センター・フェロー。横総合計画事務所取締役。シンガポール国立大学教授。(株)AUR 建築・都市・研究・コンサルタント主宰。2017年より長島孝一アトリエ主宰。



都市をデザインする

都市デザインというが、まず”都市”という限定を外したい。農村・田園の居住をも視野に入れて人間居住地 (Doxiadis の謂う Human Settlement)”と言い換え、”都市をデザインする”を拡大して”人間居住地进行をデザインする”と言いたいわけである。

人間居住地は物的環境 (Physical Environment) と、その中での人間活動 (human activity) とが相互に干渉 (interact) する”場”である。

人間を居住の主体として位置付けるなら、居住環境をデザインするとはその場の人間活動 human activity を可視化し空間化すること、あるいは逆に空間のあり方をデザインすることによって望ましい人間活動を触発するという過程・と物質化・空間化・デザインの作業を含むことになる。

それは単に見かけの”都市景観”を先験的にデザインするとは異なる。例えば美しい衣装を纏ったファッションモデルが居るとする。その場合当の衣装はモデルの人間的内容を表してはおらず、外から見ると

~~~~~  
鯨食普及推進世界連盟の終身名誉会長を自認している私がまだ鯨の聖地である太地 (TAJI) の漁港に参拝していなかった。白人共が傲慢な反捕鯨を叫ぶなかで太地の「勇魚 (いさな)」を書いた C・W・ニコルさんに「よく書いてくれました」と礼を言った時、「実は私はまだ行ってないんです」  
~~~~~  
調子者と言われても仕方がない。

そういう次第で、衆院選と台風 21 号が通過した直後の爽やかな太地へ、私は行った。太地は紀伊半島の南端に在る。JR の各駅停車でゆったりと 4 日間紀伊半島を一周した。

車窓の風景、途中下車して歩くシャッター街、

現象であり見ものである。同様に”景観”とは観察者にとり客観的物物理的な見え方の現象であり、その意味で表層的な現象だ。このような都市の見かけの状態が都市景観であって、それを設計するのがすなわち都市デザインではない。

ル・コルビュジェが「家は住むための機械である」と述べたとき「住む」という人間活動を先ず想定し、それを出発点として家と集住のあり方・都市を合理的に創ると述べたに他ならない。即ち個人あるいは集団として”どう住みたいか”という根本動機、暮らし方の内容を未来に向けて明かにし、都市という言葉で表された居住環境をデザインしようということだったろう。

歴史的に見て都市の形態は、その時代の人間や社会の価値観の反映ないしは実現として表現されている。戦後初めての CIAM(国際建築会議) のテーマは”都市のコア”だった。ヨーロッパ文明が営々と築いてきた市民社会がその途上二度の世界大戦で分断され破壊された現実の中で、改め

静かな家並み、ひと際立派な国道と道の駅。どこにもある日本の田舎の貧相な風景、美しくもあり醜くもある。そしてそんなこととは無関係に人々は、日本人であることに満足して平和で穏やかに暮らしている。日本はいい国だなあと、心から思う。ヨーロッパの風景を見慣れた自分に、古い日本人の DNA が甦るような甘酸っぱい旅だった。



(井口勝文 GALLERIA ■ INOPL A S ■都市建築デザイン研究所)

て人と人との絆を取り戻す契機として、人間的な交流を生成する核・コアの実現を都市の復興の要として提案したのだった。

その時意識されていたのはおそらく中世からルネサンスにかけて市民社会の中で成熟を遂げ、その遺産として存続するヨーロッパ都市の大小の広場や小路のヒューマンスケールであり、そこでの human activity であろう。その回復によって再び市民共同体の共歓的な日常が回復され、都市の普遍的存在意義が復活し、新しい未来への起動力が生まれる事を期待したのだと思う。そこに都市デザインの不変のテーマがある。

社会の価値観が多様化していると言われる。その対応には様々な手段が必要だろう。しかし最も普遍的で永続性ある価値をひとつ取り上げるならば、都市という場での人間同士の交流に基づく convivial (共歓的) な社会的価値の生成実現であり、その手段としての face to face communication であろう。それを可能とする”場”の再構築が今再び求められている。

都市・人間居住環境をデザインするとは、その中身となる人間の生き様を、広くは”市民社会”のあり方・価値観として捉え、具体的には当該地域を”場”として生成する行為である。これには過去と現在と未来をつなげる社会・文明的価値の思索とそれに基づく方向づけ・シナリオが求められ、それらを誘導補助する優れた空間デザインが必要とされる。そこに本物の都市・人間住環境のデザインが成り立つだろう。

この普遍的価値に向けた人々の意識、無意識の存在を察知し、場としての実現した時、都市デザイナーは現代の市民的な都市社会の実現を補助 (enhance) したことになるのではないかと。

今号の「都市をデザインする」は日本を代表する都市デザイナーの長島孝一さんに寄稿していただいた。

そこで、都市デザイン・プロジェクト 100 選においても、彼がごく最近にウェールズの奥様の実家の目の前の道路の歩道を整備させた事例を紹介させてもらう。それは、大岡川プロムナードといった氏の著名な都市デザイン作品と比べたら、ごく小さなものであるし、彼はデザインをしたというよりかは、その公共空間の問題を市役所に指摘しただけに過ぎないかもしれないが、ウェールズと日本という公共空間、公共政策の違いを考えるうえでも示唆に富む事例であるので、ここに紹介したい。

長島氏の奥様キャサリンさんの実家は、北ウェールズのアングレシー島にある。島といっても、もともとは半島で、半島の付け根が切れて海に繋がったものだ。半島の先端にはアイルランドのダブリンへの連絡船が出るホーリーヘッドの港がある。この半島の本島よりのタルウィンという集落に、その実家はある。裏庭はちょっと高台の丘になっているのだが、そこからはウェールズの最高峰であるスノーデンの山塊が展望できる。

この実家の前の道路のデザインに関して、長島さんが役場に疑問を呈した。その内容に関して、長島さんが今年の夏に私に送ってくれた手紙を引用する。「一昨年の夏に来た時、以前から歩行者にとってあまり安全でなく気になっていた家の前面道

路の交通量が増えていることに気がつき、郡庁 (人口約 5 万人対象) に改善を申し込みました。

郡庁でも気にしていたようで、数日後早速に郡庁の道路課の主任技師が助手を連れて現地に来て実測を含めた検分をし、私も意見交換して帰って行きました。外国人の私が出しゃばって設計スケッチ図面を添えて出したわけですが、驚いたことに、役所は非定住の日本人を差別することも、プロとしてのプライドにこだわることもなく、客観的判断として私の案を採用し昨年度実施施工してきてくれたのです。さすが大人だと思いましたね!

改善内容は、幅員全体としては拡幅することなく旧幅員をそのまま維持し、その中で部分的に登り優先の一時一方通行のシステムを作り、余った幅員の中で幅 1 メートルほどの片側歩道を設置する工事を昨年完成させていたのです。行政は客観的に市民の役に立つことを public servant の責務として意欲をもって直ぐに行動に移す、その地域市民社会のあり方が実感できたわけで、感激しました。さっさくお向かいさんをはじめ、顔を合わせると近隣の人々から感謝されたのも望外でした。」

このメールを読んだ腰が軽すぎる私は、早速現地を訪れたのだが、歩道を拡張すると対向車が来れなくなる。しかし、それは対向車が来る時は、幅がある場所で一時停止して対向車をやり過ごすことで処理することにしていた。あまりにも簡単すぎて、あまりにも安価な対応策であるが、その費用対効果は抜群であ

■ JUDI メンバーの紹介 ■

大阪市内の明治期に市街化し、戦災で焼け残った長屋と路地の町で生まれ育ちました。長屋が味気ない戸建住宅に建て替わり、町が壊れていくのを悲しく眺める中で都市計画家を志し、大阪大学環境工学科で学びました。同大学院修了後は都市計画コンサルへの就職を考えていましたが、ゼネコンの関係会社に都市計画事業コンサルがあると知り、竹中工務店へ。入社後は都市開発の部署に所属しながら、兼任も含めてそのコンサルが廃業するまで 20 数年間

向し、大阪を中心に市街地再開発、大規模土地利用転換、地区計画等の都市計画策定、商業企画、地域ビジョン策定等、大規模な都心開発か

岸田 文夫

きしだ ふみお
株式会社 竹中工務店



ら住民まちづくりまで、幅広く雑多な業務を担当してきました。30 代後半から仕事とは別に大阪都心のまちづくり活動に関わり、船場・三休橋筋のガス燈プロムナード、北浜テラス、ご来光カフェ等に携わってきました。

私にとって JUDI は敷居の高い団体でしたが、同じ頃から参画し、昨年から関西ブロック幹事を務めています。活発だった関西ブロックも近



長島氏によるタルウィン村のスケッチ



歩道の拡張で狭まった道路は、対向車が行き来できなくなったが、一時停止をすることで対処した。



新たに拡張された歩行空間を歩く長島氏

る。イギリスに比べると、日本は遙かに道路先進国であるが、「道路先進国」という言葉がまったく豊かさには繋がらないことに、改めてこのウェールズの集落における人間中心の対応で気づかされた。そして、とどのつまり、豊かな公共空間をつくるのは、行政の意識次第が必要条件であることも思い知らされた。(服部圭郎)

~~~~~  
年は情報発信力も弱くなり、世代交代と共に会員減など危機感が募っています。他ブロックの活動も見習いながら、新たな活性化策が必要であり、皆様のご支援をお願いしたいと思います。

~~~~~  
編集後記：今号は JUDI の創設メンバーの一人であり、日本の都市デザインの重鎮、長島孝一さんに寄稿をお願いすると同時に、彼がウェールズにおいて公共空間を改善させることに貢献したエピソードを事例として紹介させてもらった。戦後の日本における都市デザインの黎明期において活躍された氏が、現在にも求められる都市デザインの普遍的な価値を改めて言及されていることは、JUDI のメンバーへの叱咤激励とも捉えることができる。これからも JUDI 通信では、先輩のメッセージを次代に引き継ぐような役割を果たしたいと思う。今号を編集集中に、4 号にも寄稿していただいた長谷川弘直さん (都市環境ランドスケープ) が 11 月 15 日に逝去された。ここに故人を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。(JUDI 国際委員長：服部圭郎)